

琉歌の季節語(春夏秋冬)をめぐって : オモ ロや和歌との表現比較

URBANOVA, Jana / ウルバノヴァー, ヤナ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

87

(開始ページ / Start Page)

98(1)

(終了ページ / End Page)

82(17)

(発行年 / Year)

2013-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010239>

〈論文〉

琉歌の季節語（春夏秋冬）をめぐる

——オモロや和歌との表現比較——

ヤナ・ウルバノヴァー

1. はじめに

琉球諸島は日本本土と違い、亜熱帯地方に位置しているため、季節も日本の区切られた四季とは当然少し異なる趣があると思われる。そこで、本稿では、『おもろさうし』と琉歌に見られる季節を表す語が、どのようになっているのか、和歌と比較しながら考察する。

琉歌は、沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』（1531年～1623年、首里王府編）の中に収められているオモロや大和の和歌と深い関係を持つことは、これまでも指摘されている。

そして、四季を歌った琉歌に関しても和歌から琉歌への影響の指摘がある（外間、仲程1974、島袋1995、嘉手苅2003）。しかし、その指摘は両歌における「桜」「梅」「菊」などのような共通表現が何例見られるかという点や、その表現を詠み込んだ歌例の紹介、また、改作琉歌の僅かな例に関する指摘に過ぎず、徹底的な調査はいまだなされていない。

本稿では、従来の研究では調査の及んでいなかった、琉歌とオモロと和歌の中の季節語（春・夏・秋・冬）と呼応する動詞やそれ以外の表現との関係に注目し、琉歌を中心にオモロと和歌との共通点と相違点について考察したい。その結果、琉歌の季節語に関する表現は、オモロと和歌のどちらと共通点が多く見られるのか、という問題を本稿で明らかにしたい。また、季節語を詠み込んだ全ての琉歌が、どのくらいの割合で和歌を改作しているのか、さらに、どの和歌集の影響を受けているのかという問題についても指摘したい。

なお、テキストは琉歌については島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈琉歌全集』（武蔵野書院・1995年）（以下、『琉歌全集』と略す）と清水彰『琉歌大成』（沖縄タイムス社・1994年）、オモロに関しては、外間守善校注『おもろさうし上・下』（岩波文庫・2000年）を用いた。和歌は『新編国歌大観』（角川書店、CD-ROM版、1996年）（以下、『国歌大観』と略す）を活用した。

なお、本稿の「2と3」で調査対象とした和歌は、1. 上代和歌（記紀歌謡、『万葉集』）、

2. 勅撰和歌集（『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』、『新勅撰和歌集』、『統後撰和歌集』）3. 定家の歌書（『詠歌大概』、『百人一首』、『定家卿百番自歌合』）4. 為家の歌集（『為家集』、『為家千首』、『為家五社百首』、『中院集』、『為家一夜百首』）5. 頓阿の歌集（『草庵集』、『井蛙抄』、『頓阿百首 A・B』、『頓阿五十首』）6. 物語（『伊勢物語』、『源氏物語』、『狹衣物語』）である。以上の歌集を選択した理由は、池宮（1976）が以下のよう

に指摘していることによる。

一般の（琉救）士族が和文学について何を学んだかを知る上で重要なのは、那覇士族阿嘉直識が1776年幼い息子にあてた、いわゆる『阿嘉直識遺言書』である。そこには那覇士族が学ぶべき和文学が詳しく提示されている。それによると阿嘉は、定家の『詠歌大概』『秀歌大略』『百人一首』『和歌の底訓（毎月抄）』、定家の子為家の『為家卿集』、頓阿の『草庵集』『井蛙抄』『愚問賢註』、勅撰集の『古今集』『後撰集』『拾遺集』『千載集』『新勅撰集』『統後勅撰集』、江戸時代の通俗的な和歌の啓蒙書として人気のあった有賀長伯の『初学和歌式』『和歌八重垣』『浜の真砂』『歌枕秋の寝覚』、栗山満光の『和歌道しるべ』、それにこれも和歌の参考書として使われた伊勢、源氏、徒然草などがあげられている。（池宮正治『琉救文学論』1976、p. 150）

以上から、本稿の「2と3」に示した和歌は、全て主要な和歌を取り扱ったことなる。

しかし本稿の「4～7」の改作琉歌に関しては『国歌大観』の全和歌を調査対象とした。

2. 琉歌、オモロや和歌における季節語の使用率

表 1

琉歌における季節語の使用率（順位）				和歌における季節語の使用率（順位）			
1.	春	178首	43%	1.	秋	1998首	49%
2.	秋	60首	31%	2.	春	429首	36%
3.	夏	129首	14%	3.	夏	2700首	8 %
4.	冬	48首	12%	4.	冬	372首	7 %
	計	415首	100%		計	5499首	100%

琉歌における季節語の割合の高さは、「春・秋・夏・冬」という順になっており、「春」という表現を詠み込んだ歌数が最も多く、「冬」は逆に最も少ないことが分かる。それに対し、和歌における季節語の割合の高さは、「秋・春・夏・冬」という順になっている。要するに、春と秋の順以外には、両歌における季節語の使用率の順位は同様の傾向を示すと言える。

表 2

同様の傾向							
琉歌における季節語の使用率			和歌における季節語の使用率				
「春」	+	「秋」	74%	(高い↑)	「春」 + 「秋」	85%	(高い↑)
「夏」	+	「冬」	26%	(低い↓)	「夏」 + 「冬」	15%	(低い↓)

和歌の中にも、琉歌の中にも、「春」と「秋」という表現を詠み込んだ歌の割合は、「夏」と「冬」の使用率より遙かに高いことが分かる。琉歌の場合は、その割合が3倍高く、和歌の場合は、5倍以上高くなっていることが分かる。それに対し、オモロにおける季節語の使用率の状況はどうなっているのだろうか。まず、オモロの中に季節語が詠み込まれている歌が非常に少ないことは驚きの結果である。さらに、オモロには、「夏」（9首）と「冬」（4首）、（合わせて13首）のみが歌われており、琉歌と和歌の中に、特に多く見られる「春」と「秋」という表現は一切見られない。そのことは、「春」と「秋」が特に多く詠み込まれている琉歌と和歌の状況とは大幅に異なる結果となる。

3. 琉歌、オモロや和歌における季節語と動詞との組み合わせについて

表 3

琉歌における季節語と動詞との組み合わせ					和歌における季節語と動詞との組み合わせ				
順位	季節語	季節語を詠み込んだ歌数	季節語が動詞と呼応する歌数	季節語と動詞との組み合わせの使用率	順位	季節語	季節語を詠み込んだ歌数	季節語が動詞と呼応する歌数	季節語と動詞との組み合わせの使用率
1.	春	178首	69首	39%	1.	春	1998首	642首	32%
2.	秋	129首	41首	32%	2.	冬	372首	114首	31%
3.	冬	48首	11首	23%	3.	秋	2700首	694首	26%
4.	夏	60首	12首	20%	4.	夏	429首	67首	16%

琉歌にも、和歌にも「春」と動詞との組み合わせが最も多く見られる。また、逆に最も少ないのは、「夏」の歌である。両歌共に「夏」と名詞との組み合わせが目立つ。「春」／「夏」と動詞との組み合わせを比較すると、「春」のほうが、両歌の中で2倍もの高い割合を占める。また、ここでも2番目と3番目の「秋」と「冬」の順位を除けば、季節語と動詞との組み合わせも、琉歌と和歌は同様の傾向を示していると言える。一方、オモロの季節語と動詞との組み合わせはどのようになっているのかといえ、オモロの中に「夏」と「冬」という季節語は見られるが、「春」と「秋」は一切見られない。それに、「夏」が歌われているオモロ9首のうち、5首の中には動詞の「立つ」（7例）、「知らず」（2

例)や「判らず」(2例)との組み合わせが見られ、また「冬」が歌われているオモロ4首のうち、2首の中に動詞の「知らず」(2例)と「判らず」(1例)の呼応があるが、琉歌における「夏」と「冬」はそうした動詞と結ばれることが一切ないことが判明した。

ただし、ここでは「立つ」について言及する必要がある。「立つ」は季節語を歌ったオモロの中には最も多く見られ、「夏」を詠み込んだオモロのみならず、「若夏」や「うりずん」を歌ったオモロも同様の状況となっている。琉歌には一切ないものの、「夏」を歌った琉歌には、動詞の「立つ」ではない「立ち返る」という動詞が「春過ぎて夏に立ちかへて咲きゆる」のように2首見られる。動詞の「たちかえる(立変・立帰・立還)」は、『日本国語大辞典・第2版』(小学館)によると、「①繰り返す。②折り返す。折り返してすぐ返事をする。③もとの場所、行きすぎた場所などにもどる。帰る。④もとの状態にもどる。昔にかえる。問題の時点にもどる。⑤年が改まる。新しい年になる。」などの意味があり、また『沖縄古語大辞典』(角川書店、1995年)によると、「立ち返る(タチカイユン)」(琉歌のみに使用)の意味は、「元に戻る。用例のように、年にかけて用いられると、新しい年になる、年が改まる」ようになる。

この説明から、琉歌の「春過ぎて夏に 立ちかへて咲きゆる」という2句は「1)春が過ぎて、再び夏になり、咲く(花)」と「2)春が過ぎて、夏(の時)に繰り返して咲く(花)」のように、二通りに現代語に訳すことができるだろう。1)は、「夏に立ちかへて」という表現で動詞の「立ち返る」が直接に「夏」と呼応し、「再び夏になった」という意味を成す。2)は、「夏に立ちかへて咲きゆる」の表現で「立ちかへて」が副詞の役割を果たしつつ「夏」ではなく、動詞の「咲く」と呼応し、「夏の間にくり返し(再び、改めて)咲く」という意味を成す。

いずれの場合でも、「夏が立つ」という意味と異なる意味となり、「夏が立つ」とは訳せないと思われる。なぜかといえば、文法的にも「立ちかへて」の前に来る助詞は、「が」ではなく、「に」である。琉歌の場合は、季節語と「立つ」の組み合わせの例は残念ながら見られないので、確認することが不可能だが、和歌かつオモロの場合は、季節語と「立つ」の組み合わせの中では、助詞の「が」(例:若夏が立てば、おれづもが立てば(オモロ巻14-994))、或いは助詞なしの組み合わせ(例:夏立てば(オモロ巻6-327)、春立つ(古今和歌集2番歌))が見られ、助詞「に」は見られない。したがって、上の琉歌の2句はオモロにおける季節語と「立つ」との組み合わせとの関係が証明し難いと考えられる。一方、「立ち返る」が和歌では「春・夏・秋」と呼応することがあり、特に「立ち返る」は「春」との組み合わせが顕著である。また、和歌の中にも「春をば夏に たちかへて」という句が1例見られ、琉歌の「春過ぎて夏に 立ちかへて咲きゆる」に似ているものだと言える。

以上のことを踏まえて、オモロに「春」や「秋」が一切含まれていない事実から、琉歌はその語について、オモロから直接影響を受けていない可能性があり、また「夏」と「冬」と動詞との組み合わせに関しても、オモロからの影響はなかったと言えよう。要するに、季節語の使用率や動詞との組み合わせの使用率などという大まかな傾向に関し

ては、季節語を詠み込んだ琉歌は、オモロよりも和歌のほうと共通点が多く見られることが明らかとなった。

4. 「春」の歌について

「春」を詠んだ琉歌にも和歌にも「春風」「春雨」「初春」という表現は数多く見られ、各歌の中で5%～10%程度の割合があることは両歌の共通点の一つである。また、「春」と動詞の呼応についても、琉歌と和歌で「春」と一番多く呼応する動詞は「来る」であり、両歌の共通点として指摘できる。琉歌の場合は「春→来る」が24首中（13%）に見られ、和歌の場合は147首中（7.4%）に見られる。そして、「春→来る」の組み合わせは「春」と呼応する他の動詞と比べると、その割合が顕著であることが分かる（二番目に多い動詞は琉歌では3.4%となり、和歌では4.5%となるので、「来る」と比べると、かなり低い割合となっている）。「来る」以外には、例えば「なる」「行く」「知る」「待つ」「過ぐ」「別る」等が両歌に見られる。しかし、両歌には次のように独自の表現も多く見られる。和歌には「春立つ」「春めく」「春かけて」「春を経て」等という表現、琉歌には「春に浮かされて」「心が浮きやがゆる春」「春に糸かけて」等が挙げられ、それぞれの歌の独特の雰囲気醸し出す。また、和歌の場合は、動詞の「来る」が「春」だけではなく、全ての季節語との組み合わせの中で、最も多く用いられる動詞であるのに対して、琉歌の場合は、そのような状況が「春」の歌の場合にのみ和歌と使用率の高さが一番で一致している。なお、オモロに関しては上述したように、「春」を歌ったものが一切見られない点は、「春」が詠まれている琉歌と大きく異なる特徴である。

「春」を詠み込んだ琉歌を句ごとに分析し、調査を行った結果、「春」の琉歌に見られる、計556句の中に和歌の句と一致している句が計347句あることが判明した。つまり、「春」を詠み込んだ琉歌に含まれるすべての句の中で、和歌と一致している句は62.4%にまで上ることが分かった。琉歌は沖縄語で和歌は日本語で書かれており、さらに、琉歌と和歌の音数律も異なるため、琉歌の句と和歌の句が完全に似ているものとは限らない。しかし、沖縄語を日本語に置き換えてみれば、両歌の句は同様のものであることが分かる。「春」以外の季節語を詠み込んだ琉歌も句ごとにしてみると、和歌の句と類似しているものが多く見られることが判明し、句ごとの調査結果から、和歌から琉歌への影響が極めて大きいと言える。果たして「春夏秋冬」を詠み込んだ琉歌の半分以上は単に和歌の焼き直しであるのか。和歌の影響は季節語を詠み込んだ琉歌には句ごとではなく歌全体にどこまで及ぼすのか、という点を明確にしたい。そこで調査を行い、季節語を歌った琉歌の中には、和歌を意図的に改作した琉歌はどの程度の割合を占めているのかという問題の解決に努めていきたい。また、季節語を詠み込んだ琉歌はどの和歌集の影響を受けたかについても考察したい。

改作琉歌の例は様々な先行研究で提示されているのだが、その定義については言及されていない。筆者は、特定の有名な和歌を意図的に倣って、同様の表現を用い、その和歌が詠まれた言葉を沖縄古語に変えつつ琉歌の形式に合わせたものを改作琉歌であると

理解している。調査の結果、改作琉歌は、「春」を詠んだ琉歌（178首）の中に計18首見られ、およそ10%を数えることが明確になった。以下に、18首の琉歌及びその手本の和歌を列挙する。また、ここで紹介する「春」の改作琉歌の①及び②の例は、先行研究ですでに指摘されているものであるが、それ以外の16首については筆者の調査によって発見された歌である。

- ① ときはなる 松のみどりも 春くれば 今ひとしほの 色まさりけり 『古今和歌集』(24) [源宗朝臣]

ときはなる松の 変ることないさめ いつも 春くれば 色どまさる 『琉歌全集』(76) [北谷王子]

この有名な『古今和歌集』の和歌の改作琉歌について様々な研究者によって指摘があり（島袋1995, p. 19、嘉手苅1996, p. 71）、改作琉歌の典型的な例として挙げられている。

- ② 冬ながら 空より 花の ちりくるは 雲のあなたに 春にやあるらむ 『古今和歌集』(330) [清原深養父]

冬にのが 空や 花の散り 飛びゆる もしか 雲の中 春やあらね 『琉歌全集』(235) [喜屋武按司朝教]

この『古今和歌集』の和歌の改作琉歌についてもすでに指摘がある（島袋1995, p. 52）。琉歌と和歌の異なる音数律がこの改作琉歌の特徴として魅力的である。和歌の「冬ながら空より」という2句の表現は琉歌の中で「冬にのが空や」のように1句として見られ、また、和歌の「花の ちりくるは」という2句と3句にある表現も琉歌の場合に「花の散り飛びゆる」のように1句にまとめられる。すると、和歌の上3句は、琉歌の中でみごとに上2句として収まり、また、琉歌は和歌の「ながら」を「のが」（意：なぜ）に巧みに変えているため、それぞれの歌に異なる音数律や若干違う表現の選択を通して独特の趣きが生まれてくる。

- ③ ときはなる 松のみどりも 春くれば 今ひとしほの 色まさりけり 『古今和歌集』(24) [源宗朝臣]

めぐて 春くれば ときはなる松も みどり さしそへて 色どまさる 『琉歌全集』(83) [具志川王子朝盛]

この改作琉歌については特に指摘がないのだが、上の①琉歌にも似ており、そのバージョンとして『古今和歌集』の24番歌を真似て改作したものと推測できるだろう。この琉歌には、①の琉歌にない「みどり」の語が見られており、『琉歌全集』の解釈によると、「芽のことであって、緑ではない（p. 21）」のである。『日本国語大辞典』の中にも、「みどり」が色の名以外に草木の芽、新芽として定義されているので、上記の和歌の「みどり」も芽と理解してもよからう。また、和歌の場合は、「春来れば」という表現が非常に多く（計460首）見られ、いずれも5音句として見られる。それに対して琉歌も同じ「春来れば」を多く導入しているものの、音数律の関係で8音句に合わせるために当該の5音表現の前に「めぐて／いつも／のきゆて／花も」のような3句の表現を取り入れていることが特徴的である。また、和歌の場合はそれ以外には「春去り来れば」という7音句もおおよそ50首中に見られるが、琉歌にはおそらく異なる音数律という理由で、そのような表現は定着しなかった。

- ④ 常磐なる松も めぐて春来れば みどりさしそへて 色どまさる 『琉歌大成』(2954) [読谷山王子]

この歌が③の琉歌における上句の順番を取り替えているだけなので、詳しい説明は省く。①、③や④を見ると、例の『古今和歌集』の24番歌が相当人気だったことが分かる。

- ⑤ わが軸は 草の庵に あらねども 暮るれば 露の やどりなりけり 『伊勢物語』(102) [男 (在原業平)]

春の 草葉か 身が軸や 宵も暁も 露の宿る 『琉歌大成』(3670) [不明]

上の琉歌はその内容や表現以外に、形式も和歌の影響を受けている。この琉歌の形式は7・5・8・6であり、「仲風」と呼ばれ、和歌の影響を受けた琉歌である。歌人の在原業平の和歌を改作したこの琉歌は、和歌の「草の庵にあらねども（意：草の庵ではないけれども）」という否定文章を「春の草葉か」という疑問形式に置き換え、また「暮るれば（意：日が暮れると）」という時間帯（夕方）を「宵も暁も」、という期間に変更しつつ作られたものである。

- ⑥ あさみどり みだれてなびく あをやぎの いろにぞはるの かぜもみえける 『後拾遺和歌集』(76) [藤原元真]

み代の春風に みどりさしそへて なびく青柳の 色のきよさ 『琉歌全集』(314) [不明]

両歌とも同じ単語を5語用いており、内容も一致するが、和歌で主に詠まれているのは「春の風」であるのに対し、改作琉歌の主語は「青柳の色のきれいなさま」である。

- ⑦ あさみどり みだれて なびく あをやぎの いろにぞはるの かぜもみえける 『後拾遺和歌集』(76) [藤原元真]

みどりさしそへて 春風になびく 庭の青柳の 色のきよさ 『琉歌全集』(890) [小祿按司朝恒]

上の和歌は⑥の和歌と同様で、改作琉歌も⑥の琉歌に似通っているので、説明は省くが、この⑦の琉歌は特定の歌人に詠まれたものだということについてのみ指摘したい。

- ⑧ をさまれる 御代の春とや 鶯の なくねもけさは のどけるらむ 『金葉和歌集』(40) [藤原忠通]

のどかなる御代の 春に誘はれて ほける鶯の 声のしほらしや 『琉歌全集』(1078) [不明]

⑧の和歌も琉歌も中心として詠んでいるのは「鶯の鳴く声」であるが、和歌に見られる「鳴く音」という表現は琉歌には見られず、沖縄語の独特の動詞「ほける」及び「声」が用いられている。また、音数律の関係で形容詞「のどけし」（琉歌の場合は形容動詞「のどかなる」）が和歌の中では7音の下句の最後に来るのだが、琉歌の中では8音の上句に置かれており、呼応する名詞はそれぞれ異なるが、歌全体の雰囲気は両歌共に同じものとなっている。

- ⑨ 春雨の ふりそめしより 青柳の いとのみどりぞ いろまさりける 『新古今和歌集』(68) [凡河内躬恒]

降ゆる春雨の 染めなしがしちやら 庭の 糸柳の 色のまさて 『琉歌全集』(1459) [高良陸郎]

『古今和歌集』の次に重要な勅撰和歌集のこの和歌を改作した琉歌は、既述の他の改作琉歌と比べ、手本となった和歌と順番も非常に似ており、特に類似性の高い歌である。

- ⑩ いつしかと けふふりそむる はるさめに いろづきわたる 野辺のわかくさ 【新勅撰和歌集】(6)【京極前関白家肥後】

日かず降る雨に つめて染めまさる 春の若草の 色のしほらしや 【琉歌全集】(244)【不明】

両歌は若草の美しい色が誉められる点で共通している。また、和歌の「いつしかとけふ（意：いつの間にか今日）」という時間に関する表現は琉歌の中で「日かず（意：日毎に）」に置き換えることで、雨の多い南島の春と若夏の季節感が巧みに表現されている。

- ⑪ 花染の 袂を今朝は ぬぎかへて 春のかたみを たつ衣かな 【続草庵集（頼阿）】(121)【頼阿】

花染の袖も ぬぎかへて今日や 別れゆる 春の 名残り立ちゆさ 【琉歌全集】(1448)【比嘉賀慶】

頼阿によって詠まれた和歌と、その改作琉歌は内容や語順の点からも非常に似通っていることが分かる。ここで、改作琉歌は元の和歌表現を同義語に変えている工夫に注目したい。この琉歌は、和歌の「袂」を「袖」に、「今朝」を「今日」に、そして「形見」を「名残」に換えて、同じ内容の歌を同義語で言い換えている点がこの歌のオリジナリティとなっている。

- ⑫ あをやぎの みどりのいとに ぬきそめて 玉をたれたる はるのしら露 【頼阿勝負付歌合】(11)

春の柳の みどりの糸に つらぬきやる露の 玉のきよらさ 【琉歌大成】(3682)【故津波古親雲上】

この両歌のポイントは露の玉である。両歌共に露は柳の緑の糸に貫いており、玉の美しいさまが賞美される。和歌では美しさが「玉をたれたる」を通して表現されるが、琉歌は「玉のきよらさ」という琉歌の典型的な表現を用い、ストレートにその美しさを誉めている。

- ⑬ 霞みあへず なほ ふる雪に 空とちて はる物ふかき うづみ火のもと 【風雅和歌集】(34)【前中納言定家】

降ゆる雪霜も よそになら語る 埋火のもとや 春の心 【琉歌全集】(1588)【獲得久朝常】

他の改作琉歌より共通表現が少ないが、内容も歌の醸し出す雰囲気も極めて似ているので、琉歌はこの和歌を做ったと思われる。和歌の「春物ふかき」という魅力的な表現は琉歌では「春の心」となるが、共に寒い冬の中で感じられる埋火の暖かさ、ありがたさを詠む。

- ⑭ 春風の 長閑きほども 白露の 玉ぬきかくる 青柳のいと 【永享百首】(120)【公名】

のどかなる春や 青柳の糸に つれて貫く露の 玉の光 【琉歌全集】(1077)【不明】

上の和歌とその改作琉歌は何を中心として描いているかという点で若干異なる。和歌では「青柳の糸」が注目されるのに対し、琉歌は「その糸に貫く露の玉の光」を賛美している。

- ⑮ 松はなほ くる春ことの 若緑 さすや千とせも かぎりなからん【春霞集】(73)【毛利元就】

千歳経る松も めぐて 春くれば みどりさし添へて 若くなゆさ【琉歌全集】(1427)【読入しらず】

この改作琉歌も手本となった和歌とは若干順番がずれているが、⑧の歌にもあるように、和歌の下句の表現（「千歳」）が琉歌の上句の最初に詠み込まれる。当該の表現は両歌とも「松」と関係しているため、両歌の順番が異なりながらも意味は同様のものと言える。

- ⑯ 雪のうへも 春くるけふの みちしありと かすみにけりな 四方の山のは【雪玉集(三条西実隆)】(7068)

春来ちやら今日や 空の雪はれて 四方の山の端に 霞みわた【琉歌大成】(3644)【不明】

両歌共に春が来て、四方の山の端は霞んでいる様子を詠む。沖繩には雪が降らないが、この琉歌は和歌の雪を詠み込みつつ8音句の「空の雪はれて」という珍しい表現を用いている。また、琉歌は、和歌にもよく見られる「霞」+「渡る」という組み合わせを用いながら、この和歌における「かすみにけりな」という7音句を琉歌に相應しい6音句に変形している。

- ⑰ 香をとめて 梅が木の本 尋ぬれば そへて 聞きつる 鶯のこゑ【漫吟集(契沖)】(224)【竜公美校】

梅のもとしので 句ひにまぎれやり 春の鶯の 初声聞かな【琉歌大成】(870)【不明】

この両歌は上句の内容と下句の内容は一致しており、語順も同様であると言える。ただし、この改作琉歌の特徴は、和歌の表現を同義語に変えていることだ。和歌の「香をとめて」を「句ひにまぎれやり」、動詞の「尋ねる」を動詞の「忍ぶ」に変更している。また、琉歌の8音句に合わせるため、「鶯」の前に「春」を「声」の前に「初」を取り入れていることが分かる。

- ⑱ 夏来ぬと けふ立ちかへて 春の色 名残ぞをしき 花染の袖【為村集】(514)【冷泉為村卿家集】

花の色深く なれそめし袖も ぬぎかへて 春の 名残 ないさめ【琉歌全集】(1084)【不明】

最後に取り上げるこの改作琉歌の工夫は遊び心を持ち、大変興味深いものと思われる。上の和歌も琉歌も同様の表現を用いつつ、夏に変わる際春の色深い花染の袖を脱ぎ変えるという同じ場面を歌っている。しかし、和歌は、春が過ぎ夏になった証拠として取り上げる着物の交換の場面を深く惜しみ、過ぎ去った春を「名残ぞをしき」のように悲しく嘆くのに対し、琉歌は同じ春の着物を脱ぎ変えても名残はないと明るく伝えている。この和歌と琉歌をセットで読むと、琉歌は和歌に対する答えとなっていると思われるので、非常に興味深い改作琉歌だ。「春」を描いた和歌の名残惜しさと悲しみの特徴、また「春」を歌った琉歌の喜ばしく若々しい気持ちの特徴は、両歌を見ながら明瞭に感じることができるだろう。

以上、「春」を詠み込んだ18首の改作琉歌についてまとめると、①～⑧が平安時代（8首）、⑨～⑬が鎌倉時代（5首）、⑭～⑯が室町時代（3首）、そして⑰と⑱が江戸時代

(2首)の和歌の影響を受けているだろう。また、半数以上(10首)の歌は勅撰和歌集や伊勢物語によるものであり、頓阿(2首)、定家(1首)や躬恒(1首)の和歌の改作琉歌も見られる。

5. 「夏」の歌について

既述したように、「夏」を詠んだ和歌も琉歌も「夏」と動詞との組み合わせが他の季節語と比較し最も少なく、「夏」+名詞というパターンが著しく、例えば「夏の夜」、「夏の日」、「夏の衣」、「夏の草」、「夏山」、「夏虫」がその典型的な例である。オモロの中にも、「夏」を歌った歌が9首見えるが、「夏」と動詞との組み合わせは琉歌とは全く一致していない。また、琉歌にもオモロにも、沖縄の独特の季節「うりずん」「若夏」が共通して見られる。しかし、オモロの場合は「若夏」が全て動詞の「立つ」と呼応し、「うりずん」が「立つ」や「待つ」と呼応しているのに対し、琉歌の場合は「若夏」が動詞の「なる」や「巡る」と呼応しており、また「うりずん」も動詞の「なる」のみと呼応している。琉歌とオモロ共に共通して見られる沖縄の独特の季節表現「若夏」と「うりずん」と動詞の組み合わせに関しても、琉歌とオモロとで一致していないことが判明した。「夏」を詠み込んだ琉歌は和歌の影響をどこまで受けているのか。そこで、和歌の改作琉歌の割合を算出してみる。「夏」を歌った計60首の琉歌の中に、和歌の改作琉歌は4首のみ見られ、7%にしか及ばない。その理由は沖縄の夏は独特の趣きがあり、その季節感も琉歌に深く染み込んでいるためであろう。

以下にその4首を列挙する。なお、①及び②の歌は先行研究ですでに指摘されている。

- ① 國の夜は まだよひながら あけぬるを 雲のいづこに 月やどるらむ『古今和歌集』(166) [清原深養父]

宵とめば 明ける 國の夜の お月 雲のいづ方に お宿めしやいが『琉歌全集』(1505) [岡本岱嶺]

この改作琉歌については、島袋(1995, p. 316-317)がすでに指摘しているが、付け加えたいのは、和歌の「まだ宵ながら 明けぬるを」という2句は琉歌の「宵とめば明ける(意: 宵と思えば、すぐ明ける)」と1句に収まり、また琉歌の「月」は音数律の関係で「お月」となっており、同時に相応しい尊敬語「めしやいが(意: なさる)」も付いている点である。

下記の琉歌も①と同じ和歌を手本に改作したものであるため、琉歌のみを示す。この琉歌についても、すでに指摘がなされている(島袋1995, p. 277)。

- ② 宵とめば 明ける 國の夜の 月や 白雲にやどる 暇やないらぬ『琉歌全集』(1310) [読入しらず]

- ③ つつめども かくれぬ物は 夏虫の 身よりあまれる 思ひなりけり『後撰和歌集』(209) [わらは]

つつでつつまらぬ 哀れ 夏虫の 身にあまるほどの 思やれば『琉歌全集』(2320) [安仁屋政清]

この和歌の読み人と記されているのは、「わらは」であり、伝説的な男性のように思われるが、この和歌は有名で、この勅撰和歌集以外に『定家十体』等の様々な歌書に見られる。琉歌も意図的にこの和歌を改作したと考えられる。琉歌は、和歌の「つつめど

も かくれぬ（意：包んでも隠れない）」という表現を同じ意味の「つつでつつまらぬ（意：包んでも包まれない、要するに隠れない）」のように見事に変形している点を指摘すべきであろう。

④ よひよひに ならす扇 風なくは ねやのあつさは いかで忘れん 『為村集』(801) [冷泉為村卿家集]

手になれし扇の 風のないぬあれば いきやす忘れゆが 夏の暑さ 『琉歌全集』(155) [読入しらす]

「夏」を歌っている琉歌の手本になった和歌には、「夏」という表現が特に詠まれておらず、代わりに「寝屋」という表現が見られるが、「扇」や「暑さ」は詠まれるので、この和歌も夏を思わせる。この改作琉歌は和歌の表現を沖縄語の文法に巧みに変え、琉歌独自の表現を生み出した（和歌の「いかで忘れん」→「いきやす忘れゆが」、和歌の「風なくは」→「風のないぬあれば」）。

以上をまとめてみると、「夏」を歌った琉歌には和歌の改作琉歌が少なく、4首しか見られない。そのうち、平安時代の歌を手本に改作した琉歌は3首、残りの1首が江戸時代の歌集に拠るものである。手本となった平安時代の和歌（3首）はすべて勅撰和歌集の歌である。

6. 「秋」の歌について

オモロには「秋」を歌ったオモロが、全く見られないが、和歌には「秋」の歌が一番多く、琉歌には二番目に多い。「秋」と動詞と呼応に関しては和歌と琉歌の間に特別な共通点はない。ただ、和歌の「秋」も琉歌の「秋」も両歌に見られる同じ動詞と呼応することが多い。また、両歌には「秋風」や「秋の夜」が目立つ。「秋の夜のお」月」が共に非常に多く、和歌には、「秋の夜」を詠んだ歌の52%を占め、琉歌の場合も41%を占め、「紅葉」も多く見られる。

「秋」の琉歌の中に、和歌の改作琉歌と思われるものが10首見られ、およそ8%を数える。以下にその歌を列挙する。なお、すべての10首については先行研究の指摘はない。

① おく山に もみちふみわけ 鳴くしかの こゑきく時ぞ あきはかなしき 『百人一首』(5) [猿丸大夫]

深山住むならひや 紅葉ふみわけて 鹿の声聞きど 秋や知ゆる 『琉歌大成』(4167) [故津波古親雲上]

上の和歌は有名な歌で、『百人一首』以外にも『古今和歌集』などの様々な勅撰和歌集や定家の歌書にも見える。琉歌はこの有名な和歌を模倣したのであろう。最後の句に注目したいが、和歌の「秋は悲しき」は琉歌では「秋は知ゆる」と改作され、和歌に多く見える「悲し」は、おそらく音数律の関係で取り入れられなかったとも考えられるが、「春夏秋冬」の琉歌には「悲し」などの切ない気持ちを表す表現があまり見られない特徴のためとも言える。

- ② 秋の夜の あまてる月の ひかりには おくしらつゆを たまとこそ見れ『新勅撰和歌集』(281)【よみびと
しらず】

秋の夜の月に 草葉露むすで すださ見てきよらさ 玉の光『琉歌大成』(73)【不明】

この改作琉歌と和歌の語順は「光」が多少異なる。両歌は「秋の夜の月のおかげで露の玉が美しく見える」という同様の意味を表すが、それぞれの歌で異なったニュアンスも享受できる。和歌では露が秋の月の光に置かれており、玉のように見える場面が詠まれるのに対し、琉歌の場合は、秋の月の時に眺めている露の玉の光が美しいことが歌われている。

- ③ あまつそら うきくもはらふ 秋風に くまなくすめる よはの月かな『新勅撰和歌集』(253)【大炊御門
右大臣】

見れば秋風の 雲やおし払て 澄みて照る月の 影のきよらさ『琉歌大成』(4198)【不明】

両歌は秋風に雲が消えた空の中で清かに照る月を誉めているが、琉歌は和歌の「くまなくすめる よはの月かな」を「澄みて照る月の」のように改作し、最後の句の中に典型的な表現の「きよらさ（チュラサ）」を取り入れることで、和歌らしい内気な誉め方を琉歌らしい率直な誉め方に変え、最後の句で和歌と異なる魅力を生み出している。

- ④ このへの うちにやへさく しら菊の はなは千とせの はじめなりける『秋風和歌集』(650)【後二条の関白】

千代の秋ごとに 七重 八重菊の 九重の内に 咲きやるきよらさ『琉歌全集』(1689)【説人しらず】

これは和歌の「九重の内に八重咲く 白菊の」を「七重八重菊の 九重の内に 咲きやるきよらさ」に変形し、「きよらさ」という語を入れ、巧みに改作している。また、和歌の「千歳」を「千代」に変えたのも改作の工夫の一つである。手本の和歌が含まれる歌集は鎌倉時代の歌人の葉室光俊によって編纂され、本人は藤原定家に師事したことが知られている。

- ⑤ 紅葉ばの 下てる色や うつるらん 錦ながる やまがはの水『宝治百首』(1926)【隆親】

澄みて流れゆる 山川の水に 色深くうつる 秋の紅葉『琉歌全集』(1530)【本村朝照】

同様の場面を詠んでいる両歌の上句と下句の順番が逆さまになっていることで、それぞれの歌の中で強調されていることも異なってくる。和歌は、紅葉の錦が流れている「山川の水」に焦点を当てているのに対し、琉歌は、きれいに澄んでいる山川の水に色深く写っている「紅葉」を以て歌を展開する。『宝治百首』は勅撰和歌集ではないものの、『続後撰和歌集』の選歌資料に充当するため、後嵯峨院が宝治2年(1248年)に当時の主要歌人40人に詠進させた百首である。したがって、琉歌の歌人もそれを参考にしていただ可能性が考えられるだろう。

- ⑥ おく露の 光をそへて 夕顔の 垣ね涼しく やどる 月影『新明題和歌集』(1571)【為教】

月に面白さ 夕顔の花の 秋の夜の露に 光をそへて『琉歌大成』(2698)【不明】

両歌の上句と下句は逆だが、内容や表現は同様で和歌の改作琉歌と考えてよい。琉歌では、「面白さ」が「涼しさ」とセットで「すださ面白さ」のように用いられることが多いため、ここでも和歌の「涼しく」という表現を琉歌の中で「面白さ」に意図的に変えたと思われる。また、和歌を詠んだ歌人の京極為教は藤原為家の三男であり、藤原定家系列の歌人に当たる。

- ⑦ あさくまの 山のは出づる 月 かけや くもりなき代の 鏡なるらん 『頼阿百首A』(40) [頼阿]

虎頭山出ぢる 秋の夜のお月 曇りないぬ御代の 鏡さらめ 『琉歌全集』(1537) [美里王子]

この改作琉歌は和歌と内容・順番が一致しているが、山の地名を沖縄の地理に合わせたり、音数律の関係で「代」を「御代」に変形するなど、改作に必要な小さな変形が見られる。

- ⑧ あさくまの 山のは出づる 月 かけや くもりなき代の 鏡なるらん 『頼阿百首A』(40) [頼阿]

虎頭山の端の 秋の夜のお月 曇りないぬ御代の 鏡さらめ 『琉歌全集』(1287) [読入しらず]

⑦及び⑧の琉歌は頼阿に詠まれた同じ和歌を手本にしているが、和歌における「山の端出づる」が⑦の琉歌の中では「山出ぢる」に変形されており、⑧の中では「山の端の」に変形されていることのみが、⑦と⑧の相違点となっている。和歌の中には「山の端」も動詞の「出づ」も含まれているため、両方の琉歌はこの和歌に倣って作られたに違いはない。

- ⑨ もも草の うらがれはつる 露霜に 一花のこる 庭のしら菊 『衆妙集』(116) [細川幽斎の家集]

四方の百草や 秋にうらがれて 霜に色まさる 庭の小菊 『琉歌大成』(4633) [不明]

この両歌も句の順番が同様であり、歌の流れは同じ傾向を見せる。琉歌は、和歌における表現をほとんどそのまま用いているが、5音句の「もも草の」に「四方の」という3音の表現を入れて、8音句に収まり、また最後の「庭の白菊」という7音句を6音句に変形するために「白菊」（4音）の代わりに「小菊」（3音）を用いることが分かる。また、和歌の「一花残る」という句の代わりに琉歌においては「色まさる」という表現が使われていることで、和歌において淋しく描かれた秋の風景は琉歌で楽観的な気持ちで彩られているものとなる。

- ⑩ いつの世に 誰か見初めし 秋の夜と 月に昔の ことを尋ねん 『鳥の迹』(625) [読入不知]

昔見そめたる 人や誰がやゆら 月に尋ねばしや 秋の今宵 『琉歌全集』(530) [読入しらず]

上の琉歌は、和歌と内容や表現の観点から同様のものであるため、江戸時代のこの和歌を意図的に改作したと言えるだろう。「昔のこと」と「秋の今宵」の順番のみが手本の和歌と異なっているが、両歌の表している意味は、上句において「昔初めて月を眺めたのは誰であるか」となり、下句において「秋の夜の月にそれを尋ねよう」となっており、共通している。

以上をまとめると、「秋」を歌った改作琉歌10首の中、平安時代の和歌を改作した歌は1首、鎌倉時代の和歌に倣ったものが最も多く7首となり、また残りの2首は江戸時代の和歌に倣った琉歌である。また、勅撰和歌集及びその選歌資料の和歌の影響を受けたものは4首あり、頓阿や定家系列の歌人の和歌の影響も2首ずつに及んでいることが判明した。

7. 「冬」の歌について

「冬」と動詞の呼応に関しても「秋」の場合と同じように琉歌と和歌の間ではあまり顕著な共通点はない。和歌には動詞「来る」の詠まれる歌数が最多であるが、琉歌の場合は動詞に偏りがなく、オモロにおける「冬」と呼応する動詞にも、琉歌と一致する動詞はない。「冬」を歌った琉歌の特徴は、悲しい趣きがあることだ。他の季節語を詠み込んだ琉歌とは違い、「冬」を歌った琉歌は「つれなさ」「つらさ」「さびしさ」という語を多く用い、全体の29%に達する。

「冬」の琉歌には和歌の改作琉歌が8首(17%)見られ、以下にそれを列挙する。

- ①『古今和歌集』の24番歌を改作した『琉歌全集』の76番歌については「春」の歌のところで既述しているので、ここは省略する。なお、この歌についてはすでに指摘がある。
- ② 神な月 ふりみふらずみ 定めなき 時雨ぞ 冬の 始なりける 『後撰和歌集』(445) [読人しらず]

天の お定めや 変わるこ ないさめ しぐれ 雲渡る 冬のはじめ 『琉歌全集』(1584) [読人しらず]

この両歌は共通表現(4例)が他の歌より少ないように思えるが、なぜ改作琉歌と判断できるのかといえ、この和歌以外に「冬の時雨」が「定めなき」と関連し、この琉歌も「時雨」を「定め」に関連付けているので、決して偶然ではないだろうと言える。ただし、ここで琉歌における「定め」の意味のズレに注目したい。和歌における「定めなき時雨」が持つ「一定しない、移り変わりやすい時雨」という意味は、琉歌になると、「天の定めは変わることはあるまい」という異なる意味となる。つまり、和歌の「定めなき(意:一定しない)」が琉歌において「お定め(意:掟)」になる。琉歌も「ない」を用いているが、それが「変わるこ」と結びつけていることで、「掟が変わらない」という意味のズレとなり、この歌の面白みとも言える。なお、手元の和歌が有名であり、『定家八代抄』などにも含まれている。

- ③ 冬の雨の 名残のきりは あけ過ぎて くらぬ空に のこる月かけ 『夫木和歌抄』(6662) [民部卿為家卿]
- 雨に 流されて 空や雲霧も はれてすみ渡る 冬のお月 『琉歌全集』(1568) [渡口政発]
- ④ ふる雨の 雲ふきはらふ 山かぜを たよりにさゆる 冬の夜の月 『為家集』(866) [藤原為家の家集]
- 空や雨はれて くもりもないらぬ すみて照り渡る 冬のお月 『琉歌全集』(1581) [歌人:高良陸輝]

③と④の琉歌の内容は為家の和歌2首と非常に近いので、影響を受けたと思われる。『国歌大観』で調べたところ、為家のこの2首のみに「雨が晴れてから雲霧も消え、澄

んで冴える冬の月がきれいに見える」という概念に「雨」の要素も含んでいるため、琉歌は為家のこの2首を参考にし、作られたと推定できよう。

- ⑤ 浦風に 声さびしくも 夜もすがら 友なし 千鳥 月に鳴くなり 【新明題和歌集】(2859)【為教】

聞くもさびしきや 冬^❶の夜の空の 月に鳴き渡る 浦の千鳥 【琉歌全集】(1574)【上江州由起】

上の和歌を詠んだ為教は、既述したように、定家系列の歌人である。この和歌の改作琉歌は、和歌との内容も表現も同様であるが、「声」を関連表現である「聞く」に置き換えたりするなどの細微なニュアンスも見られる。

- ⑥ 浅茅生の つゆのやどりも けさよりは しもおきかへて 冬^❷は来にけり 【嘉元百首】(1247)【不明】

白露の玉と 今日や初霜の 草におきかへて 冬^❸や来ちやる 【琉歌全集】(1579)【説人しらず】

「露は霜に置き換える」という概念の和歌が数多く見られ、琉歌にも2首見られる（上の歌と『琉歌全集』の1311番歌）。手本になった和歌が含まれる『嘉元百首』は『新後撰和歌集』（定家系列歌人の二条為世撰）の元となっているため、琉歌もおそらくその影響を受けたのだろう。

- ⑦ 志賀の浦の 松ふく風の さびしさに 夕なみ千鳥たちひなくなり 【新後撰和歌集】(482)【権大納言公実】

仲島の浦の 冬^❹のさびしきや 千鳥鳴く声に 松のあらし 【琉歌全集】(277)【神村親方】

この改作琉歌の特徴は、和歌における浦の地名を沖縄の事情に合わせて沖縄の地名に変えること、また和歌の7音句の「松ふく風の」の意味を維持しながら琉歌に相応しい6音句の「松の嵐」に変形することが挙げられる。なお、二条為世撰の『新後撰和歌集』に載録された歌人は定家、為家などであり、琉歌の歌人はおそらくその歌集も享受したと推定できよう。

- ⑧ 色にこそ あまぎる雪も まがひけれ 香やはかくるる 梅の下風 【延文百首】(2107)【不明】

冬^❺の白雪の 色にまぎれても かくれないぬものや 花の匂 【琉歌全集】(1587)【護得久朝置】

この両歌の内容も表現も同様であるが、それぞれの特徴も見られる。琉歌は、「香」や「まがふ」の代わりに、同じ意味を有する「匂」や「紛れる」を用い、さらに、和歌における疑問・反語を表す「香やはかくるる」をみごとに否定形の表現の「かくれない」に改作している。

以上から、「冬」を詠んだ和歌の改作琉歌8首中、平安時代の和歌集に倣ったものが2首、鎌倉時代が最多で5首、室町時代の歌集を学んだ歌が1首ある。また、上記の8首の中、4首は勅撰和歌集やその資料となった歌集に依るものであり、それ以外の3首は、為家や為教に詠まれた歌となっている。したがって、上記の勅撰和歌集も定家系列の歌人が関わっていたものであるため、「冬」の改作琉歌のほとんど（7首）は定家系列の歌人との関係が深い。

最後にオモロの改作琉歌についても述べたい。以下に示す「夏」「冬」の季節語を詠

んだ歌は季節と深い繋がりは見えないが、オモロとの関係はあるであろう。なお、このオモロの改作琉歌の存在については、嘉手苺（1996）もすでに指摘している（p. 64-65）。

『おもろさうし』（巻12・671：きみがなしが節）〔重複オモロもありー巻15・1069〕

一 伊祖の戦思ひ 月の数遊び立ち 十百年若てだ榮せ 又 意地氣戦思ひ

又 夏はしけち盛る 又 冬は御酒盛る

伊祖のいくさもり 夏しけち冬や お酒もてよらて 遊びめしやうち 『琉歌全集』（1604）〔不明〕

英祖のいくさもり 夏すきて冬や お酒もてよらて 遊びめしやうち 『琉歌全集』（1623）〔不明〕

8. おわりに

昔から沖縄の気候になじんだ季節語「夏・冬・若夏・うりずん」のみが反映されているオモロに対し、琉歌はそれらの季節語だけではなく、和歌と同様に「春」と「秋」も詠み込んでいる。さらに、琉歌も和歌も「春」と「秋」は季節語として最も高い割合を占めている。また、季節語と動詞との組み合わせに関しても、「夏」と「冬」だけではなく、オモロと琉歌の中に唯一に見られる沖縄の独特の表現「若夏」と「うりずん」と呼応する動詞も琉歌とオモロとで一致していないことが判明した。季節語と動詞／名詞との組み合わせに関しては琉歌と和歌との共通点が多い。季節語を詠み込んだ琉歌と和歌の句ごとに調査を行った結果、半数以上は類似していることが分かった。「春夏秋冬」を詠み込んだ琉歌の中に、和歌の改作琉歌も多く見られるが、その割合が半分より遙かに少なく、計415首中に40首あり、10%程度となっている。時代については、鎌倉時代の和歌集に倣った琉歌数（17首）が最も多く、続いては平安時代の和歌集（14首）であり、最後に江戸時代（5首）と室町時代（4首）が挙げられる。また、40首の中、半数以上（22首）が勅撰和歌集（古今、後撰、後拾遺、金葉、新古今、新勅撰、新後撰和歌集）、その選歌資料（宝治百首、嘉元百首、延文百首）や物語（伊勢物語）の和歌の改作琉歌であり、頓阿、そして藤原定家、為家やその系列の歌人らに関係する歌も数多く見られた。この調査結果は、本稿の「はじめ」のところで引用している、琉球士族が和文学で学んだ文献に関する事実を裏付ける結果となった。改作琉歌の歌人について調べたところ、40首の中、読人しらずの歌が半数に上るため、最初に特定の人物によって詠まれただろうとしても、改作琉歌の半数が時代の流れで大衆化したことが分かった。季節語を詠み込んだ琉歌は和歌のほうの共通点が多いものの、「夏」と「冬」の両語を歌ったオモロの改作琉歌も2首見られ、琉歌とオモロとの関係も判明した。既述の影響の可能性があるだろうと言っても、琉歌にしか見られない表現も多数あり、改作琉歌以外の琉歌には、和歌やオモロにはない独特の内容や雰囲気味わえるものが多くあるため、その問題については今後の論文の中でさらに考察を進めたいと考えている。

<参考文献>

池宮正治（1976）『琉救文学論』沖縄タイムス社

嘉手苅千鶴子（1996）「琉歌の展開」『岩波講座・日本文学史・第15巻 [琉球文学、沖縄の文学]』岩波書店、57-78頁

嘉手苅千鶴子（2003）『おもろと琉歌の世界』森話社

島袋盛敏、翁長俊郎（1995）『標音評釈琉歌全集』5版、武蔵野書院

清水彰（1984）『標音校注 琉歌全集総索引』武蔵野書院

編集委員会（1983-1992）『新編国歌大観・第1巻-第10巻 歌集・索引』角川書店

編集委員会（1996）『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2、角川書店

仲原善忠、外間守善（1978）『おもろさうし 辞典・総索引・第2版』角川書店

（2000-2002）『日本国語大辞典・第2編』小学館

外間守善、中程昌徳（1974）『南島抒情 琉歌百選』角川書店

外間守善（1995）『南島の抒情-琉歌』中央公論社

外間守善、他（1995）『沖縄古語大辞典』角川書店

外間守善校注（2000）『おもろさうし 上・下』岩波文庫

（ヤナ ウルパノヴァー・大学院博士後期課程二年）